

巻頭言

ささやかな「まこと」

武蔵野大学 政治経済学部・教授

村石 恵照

過日たまたま車中で聴いたあるラジオ放送番組で、一般聴取者からのちよつと感動的な話が紹介されていた。詳細はうろ覚えだが、大体こんな内容の話である。

妻を亡くした四十歳がらみの男性が、残された二人の子供達をある保育園に預けた。男性はそこに勤務の二十五歳の保母さんと面識を得、二人は互いに好意を抱くようになり、ついに結婚を決意する。ところが保母さんの両親は大反対である。一般的に、自分たちの若い娘が、二人の子持ちで四十歳の男性との結婚を喜んで賛成する親はいないだろう。

しかし娘は両親に切々と訴えた「この男性は、二人の子供のためを思って、もっと多くの時間を子供たちと

持つために、一流会社を辞めて、給料はずっと少ないが比較的時間の持てる現在の仕事に転職したのです。お父さんが、その男性だとしたら、子供のためにその男性のような決断をすることが出来ますか？」

やがて娘は両親とは別居して件の男性と結婚した。ある日、男性との間に生まれた一子をつれて娘は両親と再会する。そこで両親は娘の生き方に理解を示し、いまでは孫の成長を喜んでゐる、という話である。

世界には、とてつもなく悲惨な人間の生活があり、こんな話は、とるに足らないことかも知れない。

しかし私は、国情と文化とを問わず、ささやかな苦勞を克服しようとする多くの庶民のささやかな幸せを求める努力と知恵に、むしろ巨大な悲劇を生みださない重要な働きがあると考えてるのである。

ヨーロッパ史の十八世紀は理性の時代といわれ、それに連なる思潮が現代社会をおおっているが、カント、ヘーゲル、ゲーテを生んだ観念論哲学の国家ドイツで、なぜ殺戮のための殺戮をするナチス哲学が生まれたのか。歴史も縁起であるから、ドイツの悲劇は他のヨーロッパの主要国にも責任があるのだか、とにかくヨーロッパ史にはあたかも『必要な価値観』としての悲劇が組み込まれていて、悲劇の後の感激と感動に親和性を感じる体質になってしまったのではないか、と思える程である。

ここに、特に西欧の知識人の知における「退屈」という問題がある。私見によれば世の中には、退屈どころではない人々と退屈で仕方のない人々がいる、と思うのだ。一般的に考えて、人間は、特に文化人と称される人間は、ほんとうに平和を願っているのだろうか？ 彼らは情念の深いところで悲劇を期待してはいまいか？ 最低の衣食住の満足さえ得られない多数の人々がいる一方、十八世紀以来、衣食住に満たされた知識人らの生の退屈に根差す哲学が横行してはいまいか。しかしカントの時代以降、世界的に知識人とは大学教員が多数を

占め、特に人文科学系の大学教員は各国の教育界を支配しているから、そのような知の流れを批判し是正するのは大変なことである。

世間に流布する知の偏向と偽善とを事実にもとづいて批判するのがジャーナリズムであるはずだが、ジャーナリストたちも大方は大学教育の絶大な影響のもとに生み出されているから、彼らによる知識人批判が不徹底なのは当然であるし、ジャーナリストも聖人君子ではないから、ジャーナリストが彼ら自身を批判することは不可能なほどである。

「生命・いのち」の究極の平安（ニルヴァーナ）の世界を目指すのが仏教であるが、どうやら我々は、本質的にやはり迷いが大好きらしい。生物としての人間の生理的に避けがたい根本的迷いは食欲と性欲に根差しているが、文化的・社会的な迷いは、名・利・人師、つまり名声欲・所有欲・支配欲である。退屈だといっては悲劇を創り、それを克服することに人間性の進歩を感じ、やがてまた更なる悲劇の刺激を求めてゆく。我々は悲劇の後の悦楽の魅力には抗しきれないようである。

しかし人間の営みには、その様な悲劇好みの情念の他に、世界への知的探究という理性的な欲求もある。特に自然科学の分野においてはそうである。

要するに、生きる欲望に根差した生存競争をつづけながら、情念においては快楽と刺激、悲劇と喜劇を追い求め、世界構造への知的探究を営みながら、生きることの究極の目標が「生命・いのちの究極の平安（ニルヴァーナ）」の世界である、ということになかなか納得しないのが人間の間である。

先に庶民のささやかな努力と知恵の意義について触れたが、知識人による観念化した世界の解釈ではなく、

庶民の生活のささやかな一面に真実を求めることの意義を改めて見直したいものである。

特に日本の仏教文化の中には、ささやかな小さきもの、さりげなき「もの・こと」に焦点を当てて、そこに「まこととそらごと」を洞察する知恵が育まれていると思われる。

「まことの外に俳諧なし」を唱えた上嶋鬼貫（一六六一—一七三八）の一句。

つくづくとおもふ

我レむかし踏みつぶしたる蝸牛哉

「わたしは、昔しあるとき蝸牛を踏みつぶしたことがあったなあ」が表層の意味である。「我レむかし」を「割れむ・かし」（「む」は推量の助動詞、「かし」は助詞で、みずから強く確認する気持ちを表す）と読んで、「きつと割れることだろう、と思いつつ蝸牛を踏みつぶしてしまったなあ」が別の意味である（このところの国語学的な解釈は本学松村武雄先生のご教示である）。ここには鬼貫の蝸牛（かぎゅう・かたつむり）というささやかないのちに対する意味のない殺意があったかもしれない。根源的な意味で、殺意とは最も意味のない生命の行為である。そんなことをしてしまふ「わたし」でもあるが、しかし同時に、そんなささいなことを「つくづくとおもふ」わたしでもある。

仏教の無常観は同時に生理的に実感される無常の感でもあるが、それは、一定の余裕を秘めた心境における、死を内包したいのちを感じる時に感得されるべきものであり、これが日本的「まこと」の美意識につながるものである。

のである、と私は考えている。「一定の余裕を秘めた」とは、拷問を受けたり戦場などで命がけの体験をしたから生まれるということでもないことである。無常観の感は、ある種のもつとも贅沢な死生の感といってよく、それは知識人の観念的知の賢らを超えた愚の自覚でもあり、しかも具体的なささやかないのちの観察から生み出されるものである、とも言えるだろう。無常観の感は、そこで一流の仏教者において体得されていることである。

「露の世は露の世ながらさりながら」（一茶）

（巻頭言は、通常一乃至二頁のものだが、この号で巻頭言を取りやめるそうなので、また長さに特別の制限はないということを真に受けて、ささやかな駄文が長くなってしまった。ご寛恕を乞う次第である）